



徳田秋聲集

日本文学全集 11



筑摩書房

日本文学全集11 徳田秋聲集

昭和四十五年十一月一日発行

著 者 徳田秋聲

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所

徳田秋聲集 目次

あらくれ

三

仮装人物

二三

縮 図

二九七

或売笑婦の話

四二〇

花が咲く

四三〇

風呂桶

四三六

町の踊り場

四四〇

チビの魂

四四九

のらもの

四六三

年 譜

四八〇

人と文学

四八八

平野謙

德田秋聲集

縮
更
山

利
根
の
川
筋

築
う
ね
り

新
作

あらくれ

お島が養親の口から、近いうちに自分に入婿の来るよしをはのめかされた時に、彼女の頭脳には、まだ何等の分明した考へも起つて来なかつた。

十八になつたお島は、その頃その界限で男嫌ひといふ評判を立てられてゐた。そんなことをしずとも、町屋の娘と同じに、裁縫やお琴の稽古でもしてゐれば、立派に年頃の綺麗な娘で通して行かれる養家の家柄ではあつたが、手頭などの器用に産れついてゐない彼女は、じつと部屋のかなかに坐つてゐるやうなことは余り好まなかつたので、稚いをりから善く外へ出て田畑の土を弄つたり、若い男達と一緒に、田植に出たり、稲刈に働いたりした。而してそんな荒仕事が如何かすると寧ろ彼女に適してゐるやうにすら思はれた。養蚕の季節などにも彼女は家中の誰よりも善く働いてみせた。さうして養父や養母の氣に入られるのが、何よりの楽しみであつた。界限の若いものや、傭ひ男などから、彼女は時々擲擲はれたり、猥らな真似をされたりする機会

が多かつた。お島はさうした男達と一緒に働いたり、ふざけたりして燥ぐことが好きであつたが、誰もまだ彼女の頬や手に触れたといふ者はなかつた。さう云ふ場合には、お島はいつも荒れ馬のやうに暴れて、小ツビどく男の手顔を引つかくか、さもなくば人前でそれを素破ぬいて辱をかせるかして、自ら悦ばなければ止まなかつた。

お島は今でもその頃のことを善く覚えてゐるが、彼女がこゝへ貫はれて来たのは、七つの年であつた。お島は昔氣質の律義な父親に手をひかれて、或日の晩方、自分に深い憎しみを持つてゐる母親の暴い怒りと惨酷な折檻から脱れるために、野原をそつち此方彷徨いてゐた。時は秋の末であつたらしく、近在の貧しい町の休み茶屋や、飲食店などには赤い柿の実が、枝ごと吊されてあつたりした。父親はそれらの休み茶屋へ入つて、子供の疲れた足を劬はり休めさせ、自分も茶を呑んだり、蓑をふかしたりしてゐたが、無智なお島は、茶屋の女が剃いてくれる柿や塩煎餅などを食べて、臆病らしい目でそこらを見まはしてゐた。今まで赤々してゐた夕陽がかげつて、野面からは寒い風が吹き、方々の木立や、木立の蔭の人家、黄色い懸稻、動い畑などが、一様に夕濛霧に裹まれて、一日苦使はれて疲れた体を慵げに、往来を通つてゆく駄馬の姿などが、物悲しげにみえた。お島は大きな重い車をつけられて、柔順に引張られてゆく動物のしよぼ／＼した目などを見ると、何となし涙ぐまれるやうであつた。氣の荒い母親からのがれて、娘の

遺場に困つてゐる自分の父親も可哀さうであつた。

お島は爾時、ひろくした水のほとりへ出て来たやうに覺えてゐる。それは尾久の渡あたりでもあつたらうか、のんどりした暗碧なその水の面にはまだ真珠色の空の光がほのかに差してゐて、静かに漕いでゆく淋しい舟の影が一つ二つみえた。岸には波がだぶ／＼と浸つて、怪獣のやうな暗い木の影が、そこに揺めいてゐた。お島の幼い心も、この静かな景色を眺めてゐるうちに、頭のうへから爪先まで、一種の畏怖と安易とにうたれて、黙つてじつと父親の瘦せた手に縋つてゐるのであつた。

二

その時お島の父親は、どういふ心算で水のほとりへなぞ彼女をつれて行つたのか、今考へてみても其の心持は素より解らない。或は渡を向ふへ渡つて、そこで知合ひの家を尋ねてお島の体の始末をする目算であつたであらうが、お島はその場合、水を見てゐる父親の暗い顔の底に、或可恐しい惨忍な思着が潜んでゐるのではないかと、ふと幼心に感じて、怯えた。父親の顔には悔恨と懊惱の色が現はれてゐた。

赤児のをりから里にやられてゐたお島は、家へ引取られてからも、氣強い母親に疎まれがちであつた。始終めそめそしてゐたお島は、どうかすると母親から、小さい手に焼火箸を押しつけられたりした。お島は涙の目で、その火箸

を見詰めてゐながら、剛情にも其の手を引込めようとはしなかつた。それが一層母親の憎しみを募らせずにはおかなかつた。

「この業つく張め。」彼女はじり／＼して、さう言つて罵つた。

昔は庄屋であつたお島の家は、その頃も界限の人達から尊敬されてゐた。祖父が將軍家の出遊のをりの休憩所として、広々した庭を献納したことなどが、家の由緒に立派な光を添へてゐた。その地面は今でも市民の遊園地として遺つてゐる。庭造りとして、高貴の家へ出入してゐたお島の父親は、彼が一生の瑕としてお島たちの母親である彼が二度目の妻を、賤しいところから迎へた。それは彼が、時々酒を飲みに行く、近辺の或る安料理屋にゐる女の一人であつた。彼女は家にゐては能く働いたが其の身状を誰も好く言ふものはなかつた。

お島が今の養家へ貰はれて来たのは、渡場でその時行逢つた父親の知合ひの男の口入であつた。紙漣場などをもつて、細々と暮してゐた養家では、その頃不思議な利得があつて、遽かに身代が太り、地所などをどし／＼買入れた。

お島は養親の口から、時々その折の不思議を洩れ聞いた。

それは全然作り物語にでもありさうな事件であつた。或冬の夕暮に、放浪の旅に疲れた一人の六部が、そこへ一夜の宿を乞ひ求めた。夜が明けてから、思ひがけない或幸ひが、この一家を見舞ふであらう由を言告げて立去つた。其の旅

客の迹に、貴い多くの小判が、外に積んだ格かざのなかから、二三日たつて発見せられた。養父は大分たつてから、一つはその旅客の迹を追ふべく、一つは諸方の神仏に、自分の幸を感謝すべく、同じ巡礼の旅に上つたが、終にそれらしい人の姿にも出逢はなかつた。左に右、養家はそれから好い事ばかりが続いた。ちよい／＼町の人達へ金を貸しつけたりして、夫婦は財産の殖えるのを楽しんだ。

「その六部が何者であつたかな。」養父は稀に門辺へ来る六部などへ、厚く報謝をするをりなどに、その頃の事を想ひ出して、お島に語り聞かせたが、お島はそんな事には格別の興味もなかつた。

養家へ来てからのお島は、生の親や兄弟たちと顔を合す機会は、減多になかつた。

三

然し時がたつて従つて、その時の事実の真相が少しづつ、お島の心に沁込むやうになつて来た。養家の旧を聞知つてゐる学校友達などから、ちよい／＼聞くとともに聞齧つたところによると、六部はその晩急病のために其処で落命したのであつた。そして死んだ彼の懷ろに、小判の入つた重い財布があつた。それをそっくり養父母は自分の有にしてつたと云ふのであつた。お島は其の説の方に、より多く真実らしいところがあると考へたが、矢張り好い氣持がしなかつた。

「言ひたがるものには、何とでも言はしておくさ。お金ができるのと何とか彼とか言ひたがるものなのだよ。」

お島がその事を、私と養母に糺したとき、彼女はさう言つて苦笑してゐたが、養父母に対する彼女の是迄の心持は、段々裏切られて来た。自分の幸福にさへ黒い汚点が出来たやうに思はれた。そして其からと云ふもの、出来るだけ養父母の秘密と、心の傷を舐りかばふやうにと力めたが、如何かすると親たちから疎まれ憚られてゐるやうな氣がしてならなかつた。

六部の泊つたと云ふ、仏壇のある寂しい部屋を、お島は夜間への往来に必ず通らなければならなかつた。そこは畳の凸凹した、昼でも日の光の通はないやうな薄暗い八畳であつた。夫婦はそこから一段高い次の部屋に寝てゐたが、お島は大きくなつてからは大抵勝手に近い六畳の納戸に寝かされてゐた。お島はその八畳を通る度に、そこに財布を懷ろにしたまゝ死んでゐる六部の蒼白い顔や姿が、まざまざ見えるやうな氣がして、身うちが慄然とするやうな事があつた。夜はいつでも宵の口から臥床に入ることにしてゐる父親の寐言などが、ふと寢覺の耳へ入つたりすると、それが不幸な旅客の亡霊か何ぞに壓されてゐる苦悶の声ではないかと疑はれる。

陽氣のほか／＼する春先などでも家のなかには始終湿っぽく、陰惨な空氣が籠つてゐるやうに思へた。そして終日庭むきの部屋で針をもつてゐると、頭腦がのう／＼して、

寿命がちぎまるやうな鬱陶しさを感じた。お島は糸屑を払ひおとして、裏の方にある紙漉場の方へ急いで出ていった。

藁畳を控へた広い平地にある紙漉場の葎簀に、温かい日がさして、楮を浸すために氾々と湛へられた水が生暖かくぬるんでゐた。そこらには桜がもう咲きかけてゐた。板に張られた紙が沢山日に干されてあつた。この商売も、この三四年近辺に製紙工場が出来などしてからは、早晚罷めてしまふつもりで、養父は余り身を入れぬやうになつた。今は職人の数も少かつた。そして幾分不用になつた空地は庭に作られて、洒落た枝折門などが當はれ、石や庭木が多く植ゑ込まれた。住居の方もあちこち手入をされた。養父は二三年そんな事にかゝつてゐたが、今は單にそればかりでなく、抵当流れになつたやうな家屋敷も外に二三箇所はあるらしかつた。けれど養父母はお島に詳しいことを話さなかつた。

「貧乏くさい商売だね。」お島は自分の稚い時分から居すわりになつてゐる男に声かけた。その男は楮の煮らるゝ釜の下の方を見ながら、跪坐んで衰を喫つてゐた。

鬚の伸びた蒼白い顔は、明るい春先になると、一層貧相らしくみえた。

「お前さんの紙漉も久しいもんだね。」

「駄目だよ。旦那が気がないから。」作と云ふその男は俛いたまゝ答へた。「もう楮のなから小判の出で来る氣遣もないからね。」

「真実だ。」お島は鼻頭で笑つた。

お島は幼い時分この作といふ男に、よく学校の送迎などをして貰つたものだが、養父の甥に當る彼は、長いあひだ製紙の職工として、多くの女工と共に働かされたのみならず、野良仕事や養蚕にも始終苦使はれて来た。而して氣の強い主婦からはがみ／＼言はれ、お島からは家か何ぞのやうに忌嫌はれた。絶え間のない労働に堪へかねて、彼は如何かすると氣分がわるいといつて、少し遅くまで寝てゐるやうなことがあると、主婦のおとはは直きに氣荒く罵つた。「おい／＼、この忙しいのに寝てゐる奴があるかよ。旧を考へてみる。」

おとはは作の隠れて寝てゐる物置のやうな汚い其の部屋を覗込みながら毎時のお定例を言つて嘔鳴つた。甲走つたその声が、彼の脳天までびんと響いた。作は主人の兄にあたるやくざ者と、どこのものともしれぬ旅芸人の女との間にできた子供であつた。彼の父親は賭博や女に身上を入揚げて、その頃から弟の厄介ものであつたが、或時身寄を頼つて、上州の方へ稼ぎに行つてゐたをりに其の女に引つかゝつて、それから乞食のやうに零落れて、間もなくまた二人でこの町へ復つて来た。其の時身重であつたその女が、作を産みおとしてから程なく、子供を弟の家に置去に、どこともなく旅へ出て行つた。男が病氣で死んだと云ふ報知

が、木更津の方から来たのは、それから二三年も経つてからであつた。

お島はおとらが、その頃のことを何かのをりには作に言聞かせてゐるのを善く聞いた。おとらは兄夫婦が、汽車にも得乗らず、夏の暑い日と、野原の荒い風に焼けやつれた黧い顔をして、疲れきつた足を引きずりながら這込んで来た光景を、口癖のやうに作に語つて聞かせた。少しでも怠けたり、ずるけたりすると其を持出した。

「あの衆と一緒にだつたら、お前だつて今頃は乞食でもしてゐたらうよ。それでも生みの親が恋しいと思ふなら、いつだつて行くがいい。」

作は親のことを言出されると、時々ぼろ／＼涙を流してゐたのだが、終にはえへ／＼と笑つて聞いてゐた。

作はそんなに醜い男ではなかつたが、いぢけて育つたのと、発育盛りを劇しい労働に苦使はれて栄養が不十分であつたので、皮膚の色沢が悪く、青春期に達しても、ばさばさしたやうな目に潤ひがなかつた。主人に吩咐かつて、雨降りに学校へ迎へに行つたり、宵に遊びほうけて、何時までも近所に姿のみにえなりなどは、遠くまで捜しにいたりして、負つたり抱いたりして来たお島の、手足や髪の見ちがへるほど美しく肉づき伸びて行くのが物希しくふと彼の目に映つた。たつぷりした其の髪を島田に結つて、なまめかしい八つ口から、むつちりした肱を見せながら、襷がけで働いてゐるお島の姿が、長いあひだ彼の心を苦しめ

て来た、彼女に対する淡い嫉妬をさへ、吸取るやうに拭つてしまつた。それまで彼は歴々とした生みの親のある、家の後取娘として、何彼につけておとらから街らかす様に、隔てをおかれるお島を、誼はしくも思つてゐた。

五

お島が作を一層嫌つて、侮蔑するやうになつたのも其の頃からであつた。

蒸暑い夏の或る真夜中に、お島はそこらを開放して、蚊帳のなかで寝苦しい体を持余してゐたことがあつた。酸っぱいやうな蚊の唸声が夢現のやうな彼女のいら／＼しい心を責め苛むやうに耳についた。その時ふとお島の目を脅かしたのは、蚊帳のそとから覗いてゐる作の蒼白い顔であつた。

「莫迦、阿母さんに言付けてやるぞ。」

お島は高い調子に叫んだ。それで作はのそ／＼と出ていつたが、それまで何の気もなしに見てゐた其と同じやうな作の挙動が、その時お島の心に一々意味をもつて来た。お島は劇しい侮蔑を感じた。或時は野良仕事をしてゐる時につけ廻されたり、或時は湯殿にゐる自分の体に見入つてゐる彼の姿を見つたりした。

お島はそれ以来、作の顔を見るのも胸が悪かつた。そして養父から、善く働く作を自分の婿に扱はうとしてゐるらしい意嚮を洩されたときに、彼女は体が竦むほど厭な気持ち

がした。しかし養父のその考へが、段々分明して来たとき、お島の心は、自ら生みの親の家の方へ嚮いていつた。「何しろ作は己の血筋のものだから、同じ継がせるなら、彼に後を取らせた方が道だ。」

養父は時をり妻のおとらと、其の事を相談してゐるらしかつたが、お島はふとそれを立聞きしたりなどすると、堪へがたい圧迫を感じた。我儘な反抗心が心に湧返つて来た。作の自分を見る目が、段々親しみを加へて来た。彼は出来るだけ打撃けた態度で、お島に近づかうとした。畑で桑など摘んでゐると、彼はどんな遠いところで、忙しい用事に働いてゐる時でも、彼女を見廻ることを忘れなかつた。彼はその頃から、働くことが面白さうであつた。叔父夫婦にも従順であつた。お島は一層それが不快であつた。

おとらが内々お島の婿にしようとしてゐるらしい或若い男の兄が、その頃おとらのところへ入浸つてゐた。青柳と云ふ其の男は、その町の開業匠として可也に顔が売れてゐたが、或る私立学校を卒業したといふ其の弟をも、お島はちよ／＼見かけて知つてゐた。

気爽で酒のお酌などの巧いおとらは、夫の留守などに訪ねて来る青柳を、よく奥へ通して銚子のお燭をしたりしてゐるのを、お島は時々見かけた。一日かゝつて四十把の楮を漉くのは、普通一人前の極度の仕事であつたが、おとらは働くとなると、それを八十把も漉くほどの働きものであつた。そして人のいゝ夫を其方退けにして、傭ひ人を見張

つたり、金の貸出方や取立方に抜目のない頭脳を働かしてゐたが、青柳の顔が見えたと、どんな時でも彼女の様子がそは／＼しずにはゐなかつた。

お島の目にも、愛想のいゝ青柳の人柄は好ましく思へた。彼女は青柳から始終お島坊々々と呼びなづけられて来た。最近青柳がいつか養父から借りて、新座敷の造営に費つた金高は、少い額ではなかつた。

六

お島は作との縁談の、まだ持ちあがらぬずつと前から、よく養母のおとらに連れられて青柳と一緒に、大師さまやお稲荷さまへ出かけたものであつた。天性目性の好くないお島は、いつの頃からこの医者に時々かゝつてゐたか、分明覚えてゐないが、そこにゐたお花と云ふ青柳の姪にあたる娘とも、遊び友達であつた。

おとらは時には、青柳の家で、お島と對の着物をお花に拵へるために、そこへ反物屋を呼んで、柄の品評をしたりしたが、仕立あがつた着物を着せられた二人の娘は、近所の人の目には、双児としかみえなかつた。おとらは青柳と大師まゐりなどするをりには、初めはお島だけしか連れていかなかつたものだが、偶にはお花をも誘ひ出した。

お花といふ連のある時は然うでもなかつたが、自分一人のをりには、お島は大人同志からは、全然除けものにされてゐなければならなかつた。

「ぢやね、小父さんと阿母さんは、此処で一服してゐるからね、お前は目がわるいんだから能くお詣りをしておいでゆつくりで可いよ。阿母さんたちは何うせ遊びに来たんだからね。小父さんも折角来たもんだから、お酒の一口も飲まなければ満らないだらうし、阿母さんだつて偶に出るんだからね。」

おとらは然う言つて、博多と琥珀の昼夜帯の間から紙入を取出すと、多分のお賽銭をお島の小さい墓口に入れてくれた。そこは大師から一里も手前にある、ある町の料理屋であつた。二人は其の奥の、母屋から橋がゝりになつてゐる新築の座敷の方へ落着いてから、お島を出してやつた。

それは丁度初夏頃の陽気で、肥つたお島は長い野道を歩いて、脊筋が汗ばんでゐた。顔にも汗がにじんで、白粉の剥げかゝつたのを、懷中から鏡を取出して、直したりした。山がゝりになつてゐる料理屋の庭には、躑躅が咲乱れて、泉水に大きな緋鯉が絵に描いたやうに浮いてゐた。始終働きづめでゐるお島は、こんなところへ来て、偶に遊ぶのはそんなに悪い氣持もしなかつたが、落着かない青柳や養母の目色を候ふと、何となく氣がつまつて居辛かつた。そして小さいをりから母親に媚びることを学ばされて、そんな事にのみ敏い心から、自然に故ら二人に甘えてみせたり、燥いでみせたりした。

「えゝ、可ござんすとも。」

お島は大きく頷いて、威勢よくそこを出ると、急いで大

師の方へと歩き出した。

町には同じやうな料理屋や、休み茶屋が外にも四五軒目に着いたが、人家を離れると直きに田圃道へ出た。野や森は一面に青々して、空が美しく澄んでゐた。白い往来には、大師詣りの人達の姿が、ちらほら見えて、或る雑木林の片陰などには、汚い天刑病者が、そこにも此処にも頭を土に摺りつけてゐた。それらの或者は、お島の迹から絡はり着いて来さうな調子で恵みを強請つた。お島は如何かすると、墓口を開けて、錢を投げつゝ、急いで通り過ぎた。

七

曲りくねつた野道を、人の影について辿つて行くと、旋て大師道へ出て来た。お島はぞろ／＼往来してゐる人や俵の群に交つて歩いていつたが、本所や浅草辺の場末から出て来たらしい男女のなかには、美しく装つた令嬢や、意気な内儀さんも偶には目についた。金縁眼鏡をかけて、細巻を用意した男もあつた。独法師のお島は、草履や下駄にはねあがる砂埃のなかを、人なつかしいやうな可憐しい心持で、ぱつぱと蓮葉に足を運んでゐた。ほてる脛に絡はる長襦袢の、ぼつとりとした膚触が、氣持が好かつた。今別れて来た養母や青柳のことは直きに忘れてゐた。

大師前には、色々の店が軒を並べてゐた。張子の虎や起きあがり法師を売つてゐたり、おこしやぶつ切り飴を鬻いでゐたりした。榮螺や蛤なども目についた。山門の上には

馬鹿囃の音が聞えて、境内にも雑多の店が居並んでゐた。お島は久しく見たこともないやうな、かりん糖や太白飴の店などを眺めながら本堂の方へあがつて行つたが、何処も彼処も在郷くさいものばかりなのを、心寂しく思つた。お島は母に媚びるためにお守札や災難除のお札などを、こてこて受けることを怠らなかつた。

そこを出てから、お島は野広い境内を、其方こつち歩いてみたが、所々に海獣の見せものや、田舎廻りの手品師などがゐるばかりで、一緒に来た美しい人達の姿もみえなかつた。お島は隙を潰すために、若い桜の植ゑつけられた荒れた貧しい遊園地から、墓場までまはつて見た。田舎爺の加持のお水を頂いて飲んでゐるところだの、蠟燭のあがつた多くの大師の像のある処の前にゐてみた。木立のなかには、海軍服を着た瘦猿の綱渡などが、多くの人を集めてゐた。お島はそこにも暫く立たうとしたが、焦立つやうな気分が、長く足を止めさせなかつた。

休み茶屋で、ラムネに渴いた咽喉を熱る体を癒しつつ、帰路についたのは、日がもう大分かげりかけてからであつた。田圃に薄寒い風が吹いて、野末のこゝ彼処に、千住あたりの工場の煙が重く棚引いてゐた。疲れたお島の心は、取留のない物足りなさに掻乱されてゐた。

旧のお茶屋へ還つて往くと、酒に酔つた青柳は、取りちらかした座敷の真中に、座蒲団を枕にして寝てゐたが、おとらも赤い顔をして、小楊枝を使つてゐた。

「まあ可かつたね。お前お腹がすいて歩けなかつたらう。」おとらはお愛想を言つた。

「お前、お水を頂いて来たかい。」

「えい、どつさり頂いて来ました。」

お島はさうした嘘を吐くことに何の悲しみも感じなかつた。

おとらはお島に御飯を食べさせると、脱いで傍に疊んであつた羽織を自分に着たり、青柳に着せたりして、やがて其処を引揚げたが、町へ帰り着く頃には、もう悉皆日がくれて蛙の声が静かな野中に聞え、人家には灯が点されてゐた。

「みんな御苦労々々々。」おとらは暗い入口から声かけながら入つて行つたが、養父は裏に何か取込んでゐた。

八

お島は養父がいつまでも内へ入つて来ようとし、入つて来ても、飯がすむと直ぐ帳簿調に取りかゝつたりして、無口であるのを自分のことのやうに氣味悪くも思つた。お島はいつもするやうに、「肩をもみませうか。」と云つて、養父の手のすいた時に、後へ廻つて、養母に代つて機嫌を取るやうにした。お島は九つ十の時分から、養父の肩を揉ませられるのが習慣になつてゐた。

おとらは一と休みしてから、晴着の始末などをすると、そつち此方戸締をしたたり、一日取りちらかつた其処らを疥

性らしく取片着けたりしてゐたが、そのうちに夫婦の間にばつ／＼話がはじまつて、今日行つたお茶屋の噂なども出した。そのお茶屋を養父も昔から知つてゐた。

此処から三四里もある或町の農家で同じ製紙業者の娘であつたおとらは、其の父親が若いをりに東京で懇意になつた或女に生れた子供であつたので、東京にも知合ひが多く、都会のことは能く知つてゐるが、今の良人が取引上のことで、ちよく／＼其処へ出入りしてゐるうちに、いつか親しい間になつたのだと云ふことは、お島もおとらから聞かされて知つてゐた。其の頃瘦世帯を張つてゐた養父は、それまで義理の母親に育てられて、不仕合せがちであつたおとらと一緒にゐるから、二人で心を合せて一生懸命に稼いだ。その苦勞をおとらは能くお島に言聞かせたが、身上ができてからの此の二三年のおとらの心持には、いくらか弛みができ来てゐた。世間の快樂については、何もしらぬらしい養父から、少しづつ心が離れて、長いあひだの圧迫の反動が、彼女を動かすると放肆な生活に誘き出さうとしてゐた。

お島は長いあひだ養父母の体を揉んでから、漸と寢床につくことが出来たが、お茶屋の奥の間での、刺戟の強い今日の男女の光景を思ひ浮べつゝ、直きに健やかな眠に陥ちて了つた。蛙の声がう／＼と疲れた耳に聞えて、発育盛りの手足が懈く熱つてゐた。

翌朝も養父母は、何のこともなげな様子で働いてゐた。

お花を連出すときも、男女の遊び場所は矢張同じお茶屋であつたが、お島はお花と一緒に、浅草へ遊びにやつて貰つたりした。お島はお花と俤で上野の方から浅草へ出て往つた。そして観音さまへお詣りをしたり、花屋敷へ入つたりして、時を消した。二人は手を引合つて人込のなかを歩いてゐるが、矢張心が落着かなかつた。

おとらは時とすると、若い青柳の細君をつれだして、東京へ遊びに行くこともあつたが、内気らしい細君は、誘はるゝまゝに素直について往つた。おとらは往返りには青柳の家へ寄つて、姉か何ぞのやうに挙動つてゐたが、細君は心の侮蔑を面にも現はさず、物静かに待遇つてゐた。

九

何時の頃であつたか、多分その翌年頃の夏であつたらう、その年重にお島の手に乗されてあつた、僅二枚ばかりの蚕が、出来揚るに間のない或日、養父とごた／＼した物言の揚句、養母は着物などを着替へて、ぶらりと何処かへ出ていつて了つた。

養母はその時、青柳にその時々貸した金のことについて、養父から不足を言はれたのが、氣に障つたと云つて、大声をたてて良人に喰つてかゝつた。話の調子の低いのが天性である養父は、嵩にかゝつて言募つて来るおとらのために遣込められて、終には宥めるやうに辞を和げたが、矢張いつまでもぐ／＼言つてゐた。

「ちつと昔しを考へて見るが可いんだ。お前さんだつて好いことばかりもしてゐないだらう。旧を洗つてみた日には、余り大きな顔をして表を歩けた義理でもないぢやないか。」養蚕室にあてた例の薄暗い八畳で、給桑に働いてゐたお島は、甲高な其の声を洩聞くと、胸がどきりとするやうであつた。お島は直きに六部のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。ぶす／＼言つてゐる哀れな養父の声も途断れ途断れに聞えた。

青柳に貸した金の額は、お島にはよくは判らなかつたが、家の普請に幾分用立てた金を初めとして、ちよい／＼持つていつた金は少い額ではないらしかつた。此の一二年青柳の生活が、いくらか華美になつて来たのが、お島にも目についた。養父の知らないやうな少額の金や品物が、始終養母の手から私と供給されてゐた。

お島は其の年の冬の頃、一度青柳と一緒に落会つた養母のお伴をしたことがあつたが、十七になるお島を連出すことはおとらにも漸く憚られて来た。場所も以前のお茶屋ではなかつた。

その日も養父は、使ひ道の分明しないやうな金のことについて、昼頃からおとらとの間に紛紜を惹起してゐた。長いあひだ不問に附して来た、青柳への貸のことが、ふと其の時彼の口から言出された。そして日頃肚に保つてゐた色色の場合のおとらの挙動が、ね／＼した調子で詰られるのであつた。

結局おとらは、綺麗に財産を半分わけにして、別れようと言出した。そして良人の傍を離れると、奥の間へ入つて暫く用算笥の抽斗の音などをさせてゐたが、それきり出ていつた。

「まあ阿母さん、そんなに御立腹なさらないで、後生ですから家にゐて下さい。阿母さんが出ていつておしまひなすつたら、私なんぞ如何するんでせう。」

お島はその傍へいつて、目に涙をためて哀願したが、おとらは振顧きもしなかつた。

夜になつてから、お島は養父に吩咐かつて、近所をそつち此方尋ねてあるいた。青柳の家へもいつて見たが、見つからなかつた。

おとらの未だ歸つて来ない、或日の午後、蚕に忙しいお島の目に、ふと庭向の新建の座敷で、おとらを生家へ出してやつた留守に、何時か為たやうに、夥しい紙幣を干してゐる養父の姿を見た。八畳ばかりの風通しのいい、其の部屋には、紙幣の幾束が日当りへ取出されてあつた。

+

お島は養父が、二三軒の知合ひの家へ葉書を出したことを知つてゐたが、おとらが歸つてから、漸と届いたおとらの生家の外は、其の返辞はどこからも来なかつた。

養父は如何かすると、蚕室にゐるお島の傍へ来て、もうひきるばかりになつてゐる蚕を眺めなどしてゐた。蚕の或